



TITLE:

歴史哲學に就いて

AUTHOR(S):

竹中, 靖一

CITATION:

竹中, 靖一. 歴史哲學に就いて. 經濟論叢 1931, 32(5): 878-885

ISSUE DATE:

1931-05-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130025>

RIGHT:

京都市大學經濟學會 經濟論叢

第五號

第三十二卷

昭和六年五月一日發行

論 叢

人稅物稅の分界並に特徵……………法學博士 神戶 正雄
人口密度と經濟生活……………經濟學博士 沙見 三郎
數學的經濟學の論理的構造の批判……………文學博士 米田庄太郎

說 苑

米の生産地と消費地との對立……………經濟學士 谷口 吉彥
信用と資本……………經濟學士 中 谷 實
國勢調査に於ける人口の概念……………經濟學士 岡崎 文規

雜 錄

都市公企業の財政的意味……………經濟學士 大谷 政敬
植民的活動に於ける政治的支配に就いて……………經濟學士 金持 一郎
歷史哲學に就いて……………經濟學士 竹中 靖一
ルドウエル『綜合經濟學』概念……………經濟學士 桑 原 晋
ムウアの

法 令

地租法・營業收益稅法中改正法律・砂糖消費稅法中改正法律・織物消費稅法中改正法律

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

歴史哲學に就いて

竹中靖一

はしがき

近時經濟學に於ける歴史派と抽象的理論派との對立は、『歴史』なるものゝ意味の誤解に基く所多きかに思はれる。我々は『歴史とは何ぞや』を、深く反省しなければならぬ。歴史哲學は、新しき意味に於いて、我々にとつて、再び重大な問題となつた。以下は、R. G. Collingwood, *The Philosophy of History*, 1930. の大要である。何らかの意味に於いて、歴史の意味を省みるの手掛ともなれば、幸甚である。

一、歴史哲學の概念

哲學とは、全體としての世界に關する思索である。

選ばれたる一部分の世界の性質について研究するものは、scientistであり、その性質そのものを研究するものは、哲學者である。精確に云ふならば、哲學は、事物の普遍的必然的性質を究め、scienceは、事物の特殊の偶然的性質を究める。

偕て、『或物の哲學』が成立するためには、その『或物』は、常に世界の單なる一片であるのみならず、全體としての世界の側面 an aspect であり、事物の普遍的必然的特質でなければならぬ。故に、『歴史の哲學』なるものが存在するとすれば、歴史は、人類の普遍的必然的關心事であり、世界の普遍的必然的側面に於ける關心事であらねばならぬ。かくてのみ、歴史は哲學と結び付く。

歴史は、過去の研究である。然るに、あらゆる事物は過去をもつ。故に事物の歴史的側面は事物の普遍的必然的側面である。過去の研究としての歴史は、この故に、人類の普遍的必然的關心事である。併し、歴史は特殊なる關心事である。歴史は知的關心事 igitur

intellectual interest であり、知識の一形式である。

歴史哲學の任務は、知識のこの形式の本質的特性を發見することに存する。

一形式の知識の本質的特性は、その知識が、それに固有な法則に従つて組織せられ、一特殊な研究領域を形成するものとして認識せられたる、一體の思想としての形を取り始めた時に於いてのみ、初めて闡明せられるものである。従つて、歴史哲學が、歴史自體の發展と並行して發展することも亦當然である。

二、歴史哲學の概念の發展

(1) その第一歩—Bacon 我々は第十七世紀以前に溯るを要しない。St. Augustine, Hesiod, Amosなどは、歴史を以て、或る神聖な、又は神により定められた計畫に従つて進行するものとなしたが、かゝる計畫は決して歴史哲學と云はるべきものでない。寧ろ、歴史的知識の一體系を築かんとした Polibius, Livy, Tacitus などの方が歴史哲學に近いものを持つてゐる。

歴史哲學に就いて

しかし、彼等の歴史も、譬へ廣汎であり、普遍的ではあつても、依然事實の敘述に終つてゐる。歴史哲學とは結局、『歴史とは何ぞや』に答へんとする眞剣な試みに他ならない。然るに、古代歴史家の中には、一人としてかゝる問題を提出せるものがない。Bacon に到つて初めて、我々は『歴史とは何ぞや』に答へんとする試みを見出すのである。¹⁾ 彼は、人間精神の作用に關する組織的研究を展開し、精神作用は、詩と歴史と哲學との三部に分れ、それらは、夫々、想像・記憶・理性なる三能力によるとした。併し、彼の歴史理論は全く簡單である。歴史的知識は、結局、記憶に依り、直接記憶し得ないことは、記憶し又は記憶せし人々の殘せる典據 authority によつて知るのである。記憶と典據とが、かくて、歴史の二重の根底を形成する。

原資料の單なる轉寫は、歴史ではあり得ない。歴史家は、文献が提供する資料を一つの纏つたものに仕上げねばならぬ。資料の加工、資料になき事跡の推定、資料の價值判斷等は、歴史家の任務である。併し、こ

1) 例へば Polibius の『普遍世界史、諸事件全體の綜概觀』の如き。

2) cf. Bacon, De Augmentis Scientiarum, 1622.

れらは、歴史學に於ける技術テクニックの發達を俟つてこそ、初めて可能となる。Baconの時代は、未だその域に達してゐなかつた。

(2)、研究方法の問題—Vico 哲學者であり、また歴史家であつた Giambattista Vico が、初めて近代歴史學の基礎を置いた。³⁾彼の主な關心が歴史研究の方法にあつたし、またその研究が古代史であり、従つて研究對象があまり世に知られないもので、資料が乏しかつたが故に、彼は却つて健全な研究方法の必要を知つた。何が信頼すべからざるかを理論的に研究することの重要さを認め、⁴⁾彼は、歴史學に於ける誤謬の主要起源を國民的幻想により古代を美化せんとする傾向の中に見出した。そして、言語學、神話學、傳説等が利用さるべきを主張した。Vicoの貢獻は次の一點にあつた—彼にとつては、歴史は典據の承認又は否定ではなく、典據の解釋に關することであつた。歴史學的思想の重點は、かくて、歴史家が依つて以て文献を解釋する所の原理に置かれたのである。Kantの論ずる如く

知識は、感覺の與料 *Data* が心自體の本質の中に基礎付けられた原理に依つて解釋せられた時、心の内部に起るものである。同様に、歴史的知識も亦、過去が置き去りし與料をば、歴史學的思想の普遍的必然的原理により解釋することによつて、歴史家が各自で築き上げたものである。かゝる基礎概念は、我々が全くVicoに負ふ所である。

(3)、普遍歴史—Herderより Hegelへ 歴史學的研究方法の發見は、普遍歴史 *Universal History* 即ち完全な世界歴史の可能性を推定せしめた。典據を修正又は補足するに役立ち得る原理の採用により、歴史は全體として敘述し得るとの基礎概念が生れた。Herderがその著の表題として以來、歴史哲學なる名稱は、特にこの種の普遍歴史に代用せらるゝに到つた。

歴史的知識の間隙を埋めんとして想像を許すを常とした爲に、普遍歴史としての『歴史哲學』は當然受くべき不信用に陥つた。彼等は皆、同一形式が度々繰返す傾向をもてる一の型を作るべく事實を都合よく案配

3) cf. Vico, *Scienza Nuova*, 1725, [ed. 2, 1730.]

4) しかし、Vicoは決して十七八世紀佛蘭西に於けるかの皮相的な『歴史的懷疑論』の如きと同一でない。彼は Baconに對する單なる *antithesis*ではなかつた。

5) Herder, *Ideen zur Philosophie der Menschengeschichte*, 1784.

した。尤も、Hegel は、かゝる粗雑な考に満足せず、ダンテとホーマーとの差異を、兩者の類似と同様、重大視しはしたが、彼にあつても、歴史は尙論理の型を繰返す所の型であつた。⁷⁾時代の系列は、結局概念の論理的系列であり、各概念は一時代の主調であつた。⁸⁾何れにしても、かくの如き考は、歴史の資料から抽出されるに非ざるが故に歴史的とは稱し得ない或物を、歴史家の知識の間隙へ挿入せしむるに到るものである。かゝる非難は、正に、普遍歴史の概念そのものに於ける根本的弱點——普遍歴史は歴史のもち得ない普遍性を要求してゐると云ふ事實に向つてゐる。これは後世に於ける同一型の思想に對しても云ひ得られるであらう。Marx の史的唯物論、Comte の三時代の法則、Spencer の進化論、近くはまた文化の連續を説く Spengler に到る迄、すべてこれらは抽象的な型の上へ不器用に捏ね上げたものである。しかし、我々は尙彼等の功績をも考察することが出来る。第一、彼等は人々に原理と研究方法の重要さを知らしめた。第二、彼

歴史哲學に就いて

等が從來の歴史に満足せず、より困難な問題を解決せんとしてゐることを明かにした。第三、彼等の結論は謂はば知識の現状を總括し、従つてその缺點に注意せしむることにより、更に次の歴史研究を刺戟した。

(4)、歴史と法則科學との差異——Schopenhauer より Windelband へ。science にあつては、法則が目的であり、事實は手段である。反之、歴史にあつては正に逆である。惡貨が絶えず良貨を驅逐するか否かは、scientist たる經濟學者の問題であり、歴史家はある特定場合の事象發見の補助手段としてこの原理に訴へ得るのみである。普遍歴史の誤謬は、事實を慎重に取扱はなかつた點にある。歴史家の對象のもつ個別性と、scientist の對象のもつ一般性との差別を強調したことは、十九世紀が歴史哲學になした貢獻であつた。既に Schopenhauer は、歴史の仕事が事實を決定するにあり science の仕事が一般法則を決定するにあると明かに言つてゐる。⁹⁾彼は矛盾せる二つの思想をもつてゐた。即ち、一方では、歴史を、平凡な經驗界を遍ひ廻る知

7) cf. Hegel, Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte, 1805-6.

8) Schopenhauer, Die Welt als Wille und Vorstellung, 1819. Bd. II. Kap. 38. Ueber Geschichte.

識として、言葉を極めて輕蔑してゐるが、他方また、歴史が人々にその過去を知らしめ、彼ら自身を理解せしむるに到ることを強調した。⁹⁾ 所謂『歴史哲學』への不信用と、またBuckleの如き『歴史を science に高めんとする』試みの破綻とに依つて、十九世紀末葉には、正當な眞面目な方法で歴史を研究せる人々は、皆、歴史が個性の科學であると云ふ確信を得た。この確信はしかし、多くの場合、歴史と science との混同を逃れしめ得はしたが、それ以上何物をなさしむることも出来なかつた。Lazarus, Steinthalの如きは、¹⁰⁾ 直觀的知識を主張したが、歴史の合理的推論的性質を破壊した。Windelband の如きも、個性の科學と云ふこの論理的怪物を容るべき場所を、知識理論の中に作らんとして概念を二種に分つたが、¹¹⁾ その關係を充分に説明することが出来なかつた。これら失敗の積極的價值は、論點となるべき眞の問題を明かにし、従つて歴史が自然科學の壓制から脱却せんとしてつあることを證した點にある。

(5)、个性的、又は歴史的判斷—Croe 歴史學的勞作と文献學的批判との經驗に依り、Benedetto Croce は一八九三年、勇敢にも藝術と歴史とが同一物なりと結論した。藝術家の仕事は、个性的な人物・景色・音調等を『見る』(即ち直觀)にあり、歴史家の仕事も亦、个性的な歴史的事實を『見る』にあるからである。これは問題を解決したのではないが、問題を行きつく所まで行かしたものである。¹²⁾ その後、彼は、彼の思想の逆説的外見を除去せんとして、知識の一般理論に修正を加へ、个性的判斷なるものを主張した。¹³⁾ 普通の論理學は、This S is P なる個別判斷を、All S is P なる普遍判斷から區別する。然るに、This S is P が歴史であり、All S is P が science である。而して、All S is P と云ふ時、我々は This P なるものを、常に眼前に思ひ浮べる。All S is P とは、『この S は、S としてのその性質に於いて P である』と云ふことを意味する。かくて、すべての知識は歴史的(个性的)知識であり、science とは个性的關係を無視せる歴史に他ならぬ。

9) この矛盾せる態度は、一は十七世紀の合理主義に、他は浪漫主義運動に由来する。

10) 両者は1859年 Zeitschrift für Völkerpsychologie und Sprachwissenschaft を創刊した。

Windelband, Geschichte und Naturwissenschaft, 1894. (Präludien, Bd. II, S.

11) M36.]

science の合理性は、All S is P なる形式にあるのでなく、正當に思索された普遍概念たる賓辭 P に存在する。故に、『アレキサンダー四世は不埒である』と云ふ時、『不埒』なる語の中に、道德哲學の全體系が含まれてゐる。此處に於いて、歴史とは、科學的な精確さ、合理性、論證性を缺くものでなく、寧ろこれらすべてを含み、而もそれを越え、それを個性的知識の中に實證するものである。

三、歴史哲學の輪廓

歴史は過去の研究である。過去は既に生起し終れる事象から成立つ。過去は現存するものでない。過去は眼前にこれを観ることが出来ぬ。我々は過去を直接知るのではなく、證據物を介して知るのである。證據物（又は史料 data）は現存するものであり、歴史家に依つて觀らるるものである。しかし、證據物のみでは充分でない。それは解釋されねばならぬ。解釋には原理を必要とする。この原理の體系が、即ち、歴史の研究方

法であり、歴史の技術である。原理の或物は scientific な性質をもち（考古學、古文書學、古錢學）。また或物は哲學的である（歴史の論理の如き）¹²⁾。

一方には史料、他方には解釋の原理、これがすべて歴史學的思想の二要素である。この兩者は別々に存在し、そして結合さるのではない。歴史家は、先づ史料を蒐集し、次に解釋するのではない。彼の出發點は、未だ解釋せられざる事實の蒐集や靜觀に非ずして、研究主題たる問題の探究にある。歴史研究は、その主題を決定するある特殊の問題の上に、その焦點が置れるのである。歴史に關するかゝる概念は、歴史家のなすべき選擇、個別化、時代區分等の根據を明かにする。もし過去なるものが歴史家から把握さるゝを待つてゐる現存事實の固い塊であるならば、選擇、個別化、時代區分等は、只氣紛れな仕方になつてゐる他はない。選擇、個別化等は、歴史研究の途上に起る問題の取扱ひの中にのみ存するのである。

過去の事實は現存しないものである故に、普遍歴史

- 12) cf. Croce, *Primi Saggi*, 1919. この書は『歴史は藝術なる大概念に包接せらる』と題する原論文、及びそれ以後の論争の抜粋を再録してゐる。
13) cf. Croce, *Logia*, 1909; *Theoria e Storia della Storiografia*, 1913. (羽仁五郎氏譯『歴史叙述の理論及び歴史』) 後者は歴史哲學に關する現代に於ける最も重要な著作である。
14) 歴史に於ける類推的論法の可能性等の問題はこの論理に俟たねばならぬ。

として表現せらるゝでもあらう如き、過去の事實の全一體と云ふ様な物も、亦存在するものでない。普遍歴史への試みは、常に失敗すべく運命づけられてゐる。すべての歴史は、何か特殊なものの歴史である。我々のなしうる最善のものも、尙、この特殊な事實に関する知識の現状を發表することに他ならぬ。如何なる歴史も、普遍であり得ないし、また決定的であり得ない。而も、あらゆる歴史は、それが盡すべく公言せるものを眞に盡してゐるとの意味に於いては、正に普遍であり得るし、それがこの主題に関する我々の知識の現状を眞に述べてゐるとの意味に於いては、決定的でもあり得るのである。すべての歴史は、その主題についての研究に於ける進歩に關しての現在への暫定的報告である。この故に、すべての歴史は、また歴史の歴史である。同じ理由を以て、すべての歴史は、歴史の歴史として、必然的に現代への敘述を贅す。如何なる時代にも、歴史は新しく書き直されねばならぬ所以は、正に此處にある。各人は各自の思想を以て歴史の研究に向ひ、彼

自身及び彼の時代の特徴となる見方からそれに近付く。しかし、かくの如き考へは、決して、歴史學を氣紛れなものたらしむるものでない。然らば、シーザーに對する私の見解が Mommsen のそれと異なる所以は如何にして可能であるか。私と彼とは多く共通な過去をもつ。而も、我々が互に異なる民族であり、夫々異なる文化と異なる時代にある限り、我々は我々の背後に多少とも異なる過去をもつ。この故に、資料解釋上の誤謬は別としても、私と彼とのシーザーに對する見解は、恐らく僅かではあらうけれど、明かに異なるに違ひない。¹⁵⁾ この差異は決して氣紛れではあり得ない。何故ならば、――すべての誤謬は別として――私は、彼の立場に立つならば、やはり彼の如き結論に達したであらうから。

最後に、過去はそれ自身は無なるが故に、過去自身に關する知識は、歴史家の目標ではあり得ない。歴史家の目標は、思索する人の目標として、現在に關する知識である。すべては現在に歸し、現在を廻つてすべ

15) 歴史からこの『主觀性』を取除かんとする試みは、常に不眞面目であり、また絶えず失敗に終つてゐる。

ては動いてゐる。歴史家は、しかし、現在の特殊なる一側面―事物が如何にして現在ある如きものになり來れるかと云ふ側面に關係する。その意味に於いて、過去は、現在の側面であり、一機能なのである。

(附言) 以上の思想が、Dilthey を中心とせる現代の Lebensphilosophie に通ずる所多きは、注意すべき事である。而も Dilthey も亦、歴史學派の哲學的基礎付により、歴史派と抽象的理論派との論争を調停せんと企圖を有してゐたのであつた。¹⁶⁾

16) W. Dilthey, Einleitung in die Geisteswissenschaften, 1883, Vorrede. [Gesammelte Schriften, I. S. XVII.]